

災害支援・教育復興にむけて

つなぐ



日教組災害対策本部

〒101-0003

東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

HP:<http://www.jtu-net.or.jp/>

第16次 連合ボランティア 報告

陸前高田へ

7月25日～29日まで、ボランティアを行った。気仙町の山間の場所で、被災したお宅の周辺の瓦礫の撤去が主な内容であった。

はじめ陸前高田のボランティアセンターを出て、市街地のあった場所に近づくにつれて、津波の被害にあった家屋が増えていった。バスの運転手さんが、「こちら辺が市街地だった。」と話してくれた場所には何もなく、数百台はあるのではないかとと思われる壊れた車が並んでいた。倒壊した家屋の木材や家具などが、3階建てのアパートより高くそこらじゅうに積まれていた。私はその衝撃的な光景と被災者を思い自然と涙があふれ出た。

私たちが行ったお宅は、60棟近くがあった集落で全壊を免れたわずか2軒の家だった。きれいな水の流れている水路を修復したり、林の中に流されてきたものをきれいに片づけたり、草刈をしたりと内容はさまざまであった。においやほこり、破傷風菌などから身を守るために、防塵マスクやゴーグル、ヘルメット・軍手などを装着し、上下長そで長ズボンで身を固める必要があった。そして夏の暑さが合わさり、長時間にわたって作業することが難しい状況だった。作業最終日の終わりに、ボランティアをしていたお宅の方が涙を浮かべながら話をしてくれた。全てを片づけることはできなかったが、この活動に参加できて本当に良かったと思えた瞬間だった。

- ・できたことの何倍も達成感や充実感などを与えてもらったこと。
- ・この取り組みの中で、日本全国の人と寝食を共にする中で、貴重な話を聞くなど交流でき、知識の幅が広がったこと。
- ・私たちができたことは、本当に些細なことだったかもしれないけれども、無力ではなかったこと。

私はこれらをボランティアに行き行って教えられました。

今回20代は私一人でした。担任の仕事や、普段の業務に追われ、なかなかボランティアに行きたくても、行けないという人は多いのではないのでしょうか。でも、「元気な地域の人少し我慢をして、大変な思いをしている地域の人に手を差し伸べる。」この姿を見せることが、どれだけ子どもたちにとっていい影響となるか、そしてそのことを子どもたちに伝え、次の世代のボランティアできる人を増やすことが、まさに「つなぐ」ことになるのではないのでしょうか。ですから、私はもっと若い人たちはボランティアをしてきて、見て、体験して、それを伝えていくことが必要なのではないかと思いました。

教職員一人の活動を伝えることで子どもたちが成長し、無限の活動へとつながっていくことができるといいですね。

